て、食事作りをしている。昼食は世話人が弁当を作っている。日々の買い物は世話人がしている。何を作ったのかはパレットに報告される。
その他
男女混合のホームがあるのは男女でいて落ち着くという方がいるためとのこと。将来的には結婚支援も考えているか問うが今のところそこまで考えていないとのこと。

4、生活体験の感想
生活棟で感じたのは、プライバシーの欠如である。「部屋の中をいつでも覗けることがプライバシーに反している」といった意識は職員の側にない。また「パンツは人のいないところではく」といった意識も利用者の側になく、プライバシーを守りたいという意識がほとんど感じられなかった。また唯一プライバシーのある１人部屋は「対人関係が難しいという問題をもった人のみ」であり、１人部屋は問題のある人の生活場所というイメージになっている。職員、利用者共にプライバシーに対する意識が低いため、トラブルなく経過しているが、そのこと自体が大きな問題だと感じた。また食事の時に「お茶を飲むかどうか」という全く個人的な内容まで自治会で取り上げ、(なぜこのようなことが議題になるのかが疑問であるが)「飲まない」と決定されると、全員がお茶を飲むことができず、みんなが水道で水を飲んでいる現実にも驚いた。健康診断の時も同様で皆たいへん従順で、不満がなく、おとなしい。職員も利用者も問題意識が非常に乏しく、単調で尊厳のない生活が繰り返されていた。
生活棟と自活訓練棟を比較すると、自活訓練棟は、個室もあり、食事も４?５人で食べるなど、家庭的な雰囲気に近く、ほっとする。もちろん「お茶を飲む」といった普通のことも自活訓練棟では自由で、自治会で決定されたから「水道の水を飲む」という酷い状況ではなかった。また柔軟性があると思ったのは、ご飯の用意や洗濯はできる人が行い、できない人はそのまわりでなんとなくうろうろしたり見たりしている。障害の重い人と軽い人をホームの中で組み合わせていると聞いていたが、この点はいいなあと思った。しかし生活の流れは、入所施設の時と同じように、帰宅、晩ご飯の用意、晩ご飯、晩ご飯片付け、風呂、おやつ、就寝と全員が同じ順序で行っていた。またおやつの内容も決められていたり、お風呂の順番のいつも同じであった。また利用者と職員の間で「規則」と考えられているものにずれがあったり、職員の利用者の地域生活に対する考え方は管理・保護的であった。
作業棟は、全員が静かに裁縫をし、穏やかな空気が流れていた。初めてさおり織りを利用者の方から教えてもらい、楽しかった。しかし思いがけず休憩時間に職員の指示的なかかわりを見て残念に思った。
全体を通して、入所施設の生活棟は人間らしい暮らしとは程遠く、人間としての尊厳が保たれているとはいえない。自活訓練棟の暮らしは、形式的には家庭的な暮らしに近いものになっていた。このことはとても大きいと思う。しかし職員のかかわりは入所施設と同様に管理・保護的であった。

６．船形コロニーOo園・SF園・HiGH生活体験
(2003年7月30日（水）～8月1日（金))

香川県明善短期大学・遠藤美貴

（１）Oo園での体験
・概要：更生施設（男性73名・女性25名）
約100名を４つのファミリーに分け、10名弱の職員（うち約半数は臨職）で対応４つのファミリー中、２つは障害が重い人のファミリーで夜勤体制をとっている。
平均在籍期間16年。平均年齢43歳。IQ測定不能36名。支援費障害区分A全員。
・これからは、各園がバックアップ施設となり、自立訓練ホームを担当。園の中から可能な人を移行。他の法人の施設にもコロニーの職員が派遣される。船形が借り上げたAPを他法人がGHにする。
(1日目)
まず、施設全体を案内される。建物の真中に事務所があり、左右に２つずつファミリー

がある。事務所から入るファミリーの入り口には鍵がかけられている。異臭がキツく、ファミリーによっては息ができないほどであった。全体的に暗く、殺風景である。トイレを修理中とのことで、廊下に便で汚れたポータブルトイレが置いてあった。

女性だけのファミリー「ユニットR」に配属になる。トイレは個室のドアがなく、廊下との仕切りもカーテン1枚だけである。居室は3～4人部屋で、家具は木目調でおしゃれであるが、私物がなく（私物を収納する鍵のかかった部屋がある）が、どの部屋も個性がない。部屋には置いてあるものの使っていないものもある。多くの部屋が以前は外から鍵がかけられていたことを表す傷が扉に残っている。中から鍵のかかった職員室に、車イスに乗った利用者がいた。他の利用者は外から職員室を眺めたり、ドアや窓を叩いている。職員は利用者を「～ちゃん」と呼ぶ。ディルームのようなところに10名くらいがぼ～としていたり、ウロウロしていたり、ずっとスリッパを投げることを繰り返していたり･･･。あとは部屋で寝ている人、廊下のソファーで寝ている人など。職員室から出ている職員は2名のみ。一緒にテレビを見たりしているが、個別の働きかけをしない。「また遊ぼうね」「ごはんまだ？」だけを繰り返す利用者がいた。食後10分位は「ごはんまだ？」言わなくなった。ヘッドギアにミトンを着けている利用者がいた。身体中傷だらけだった。ヘッドギアは人によっては鍵がついており、自分で外せないようになっているものもあった。

「食事時間は戦争だ」と園長から来ていたが、予想以上に凄まじく生活の臭いが全くしない風景であった。準備の段階から鍵のかかった食堂の窓にたくさんの利用者が集まり、外から中を見ている。机の上に手づかみで盛られた食事が置かれると、介助の必要がない人から数名ずつ職員に手を引かれ食堂に入る。入れなかった利用者はパニック的になりながら窓を叩いたり、叫んだりしている。食堂の窓ガラスは、利用者の手の跡で曇っている。

食後は歯磨きをするが、歯ブラシやコップが入っている棚も鍵つきの扉で閉じられている。私物室からパジャマや着替えが出される。着替えが始まったところで本日の体験は終了となる。

感想

「ひどい！」の一言で十分である。とっても苦痛であった。5分を30分くらいに感じた。何もすることがなく、刺激もない。スリッパを投げ続ける気持ちが理解できた。

一生懸命関わっている職員が1名いた。私にも声をかけてくれたり、「今から歯磨きです」と説明してくれる。私が何をするために来ているのか理解していないのと、このような状況になんら疑問を感じていないようだ。

私の前を、何度も何度も私の顔を見ながら通り過ぎる方がいた。私の前に来る度に声をかけ続けた。そのうち明らかに私のことを意識し始めたことが分かった。そして、ちょっと離れた所にではあるが、同じソファーに座っていた。彼女だけに限らず、他の利用者もこちらからの働きかけ次第では「手のかかる（手をかけてもいないのに）重度の人」ではなくなるのではないか？その人なりの力を感じることもあった。特にミトンをつけた彼女の反応はとっても正常だと思う。あんな環境にいると自傷も起こしたくなることだろう。

（2日目）

今日は、内科検診のため、昼食は遅れるとのこと。久々に天気もいいので、散歩を計画しているファミリーに入る。そのファミリーは「宿泊体制（＝それほど障害が重くない）」の男性23名の「ユニットK」ファミリー。若い人も多く、昨日のユニットRよりは活気があり、ファミリー内も少し生活感を感じることができる。朝礼から同席。検診の説明については「今日は検診がある」というだけ。「そのため飲食禁止。申し訳ないが、水道の栓も元から止めさせてもらう」と口頭説明。その際私たちのことを気にして「先生（＝私たち）にいい方法があれば事前に聞いておけばよかった」などといい訳っぽく話す。検診についてどのくらい前から丁寧な説明がされているのか？

帰って来てからも水分が取れないにもかかわらず、散歩に行く。しかし、ユニットRは散歩すら行かず、昨日同様園内で過ごしている様子。

散歩から帰ると再びユニットRへ行く。昨日の夕方と全く同じ服装。靴下まで同じ人がいた。ユニットRも検診のため午前中のおやつがカットされ、そのことでみんなパニック状態だった。昨日、私の前を何度も通り過ぎているだけだった人も、今日はソファーに座り同じことを何度も繰り返し叫んでいる。全体的に落ち着かない印象。昨日みかけなかった利用者もいた。

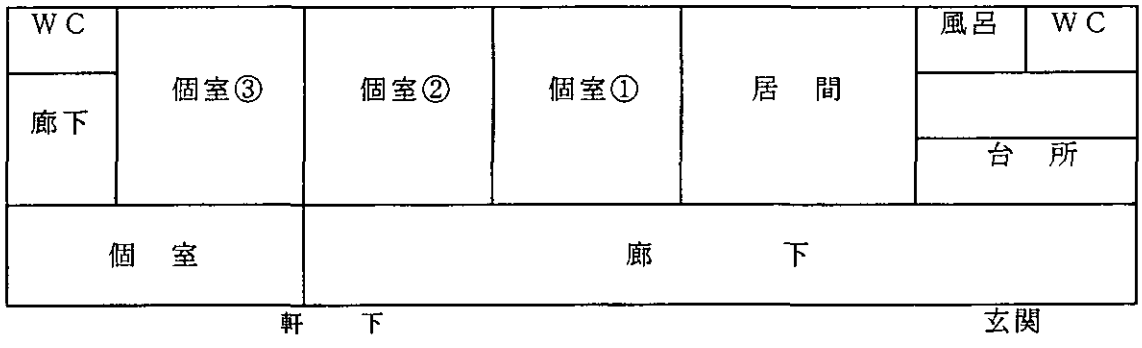
職員が足りないからと補助に入っている男性職員は、ただ座ってテレビを見ているだけ。

利用者にはなんら働きかけをしない。
昼食は、隣りの園の「SF園」へ行く。ここは授産であり、園内で作業をしている。また、GHで暮らしている人も通って来ている。食事は各自でよそって食べる。検診のため朝食が遅く、まだお腹がすいていないという人も自分の判断で食べないという選択をする。各居室も生活感があり、ディルームも暖かな印象。
昼食後ユニットRに戻る。検診が園の食堂で始まる。手伝い要員の職員は食堂前の廊下の中央にイスを置いて座り、食堂に近づく利用者を追い払うだけ。その際のことばがけも荒い。昨日からいるよく働く女性の職員が一人で利用者に対応。パニックになっている一方で園外に出る利用者を追いかけて行ったり･･･と一人でたいへんそうである。職員間の連携がみられない。さまざまはファミリーから利用者と職員が検診にやってくる。いつもと違う動きに不安を示し、パニックになっている人もいる。訳分からず連れて来られている人もいる。職員は何の説明もせず、いきなり手を引いて検診室に入る。
結局、退室する15時前になってもユニットRの利用者は検診がスタートしておらず、昼食を食べないままであった。

感想
SF園では、ユニットRと比べる為か、生活の質がとっても高いように感じる。食事も利用者と談笑しながらなので楽しい。ユニットRに帰るのがイヤでイヤで仕方なかった。
ユニットRで生活させられている人たちは、地域で生活することは無理なのだろうか？一度も経験がないまま、私たちが「無理」と判断していいのだろうか？集団で管理する必要があるのだろうか？コロニーの中でいる限り、彼女達が地域で生活できるか？という問に「No！」と答えることになるだろう。

（２）HiGHでの体験
・概要：平屋の一軒家。女性４名で生活。
家賃15,000円（水道代込み）＋食費、雑費等で本人負担月30,000円
世話人は２名体制。平日は６：00～９：00と14：00～20：00
土日は７：00～10：00と17：00～20：00

（1日目）
古い住宅街にある昔の建物なので、20畳ほどの和室を襖で仕切っている部屋が３つ（①～③）と、洋室の個室１室（④）が利用者の部屋である。よって、和室はプライバシーの保護という面からは不十分である。



本人たちは全員コロニー内の仕事に行っている。帰宅するまで世話人とお話をする。仕事としては食事の用意がメインであり、メニューは世話人に任されているという。もう一人の世話人と交換ノートのようなものでやりとりしながら連携しているという。月々の食費は決まっているが、自宅で作っている野菜などを持って来て使うこともある。買い物同行や通院同行、通帳管理も行っている。月に一度センター主催で世話人会議が開かれる。
しばらくすると本人たちが帰宅。各自着替えや片付けをした後、それぞれに過ごす。また、今日の出来事を世話人に話しながら、食事の準備をする。食後、それぞれに当番があるらしく、片づけを手分けして行う。その後は入浴したり、部屋で好きなことをして過ごす。入浴の順番は決まっているが、それはメンバー間で決めているらしい。好きなテレビ

をみんなで一緒に見て21時には就寝するらしい。各部屋にテレビがない。また、襖だけの仕切りのため音が筒抜けである。よって音楽を聴く時はヘッドフォーンをしていた。　先日まで入院していたNさんは、まだ体調は万全ではない。退院後しばらくコロニー内の園で静養。その際も「早くホームに帰りたい」ばかり言っていたとのこと。Soさんは一人で淡々と動く。自分より弱いと思う人への対応が施設の職員的である。（～したらだめでしょ？分かった？）Saさんは一番年上であるが、年齢的なこともあって、個別対応が一番必要な方。他の3人からキツく対応される。そのことで少しストレスも感じているようである。自分のことはきっちり自分で行うし、戸締りや火の始末などには一番気配りができるとのこと。Kさんは一番若く、3人のことを「お姉さん方」と呼ぶ。シャイな感じで打解けるのに時間がかかる。

（2日目）
朝行くと既に掃除や洗濯をしていた。トイレや風呂場の掃除をする人と居間や台所、廊下の掃除をする人と、洗濯を干す人、朝食の準備を手伝う人なのである。居室を掃除する人もいた。みんな丁寧に手早くしており、その印象を世話人に伝えると「前の世話人さんの教えが行き届いている」とのコメントが返ってきた。前の世話人は教育的に関わっていたのではないかと感じた。世話人はお弁当と朝食作り、洗濯干しの手伝いをしていた。食後出発の準備が終わるとバスが迎えに来る場所まで見送りに行き、業務終了。その間、他の３人のSaさんへの高圧的な言動が目立ち、その仲裁に世話人が入ることが多く見られた。世話人が苦慮していることがよく伝わってきた。

感想
コロニー内の生活があまりものひどかったので、とにかく何を見ても「素晴らしい」と思い、冷静になれない自分がいた。確かに、襖だけで仕切られている部屋では、完全にプライバシーが保護されているとは言いがたい。朝の掃除風景も施設的な印象は多少ある。
世話人のことを「Hちゃん」と呼んでいるのはいいなぁと思った。しかし、これはこの世話人だからであり、世話人次第で関わりに違いが出てくる可能性はある。
一番疑問に思ったことは、せっかく地域で暮らしているのに、コロニー内に働きに行っていることである。それもコロニーで借り切ったバスに乗って･･･。これは地域の人の「この人たちはコロニーの人＝私たちとは違う人」ということを印象付けてしまうと思う。因島であいの家のように、トラブルがあっても路線バスを使うことで、地域が変わってくると思う。

船形コロニーにおける地域移行の実態

香川県明善短期大学・遠藤美貴

はじめに

自己決定の尊重、利用者の選択の保障、利用者とサービス提供者との対等な関係の確立、利用者本位のサービスの提供を目指した「支援費制度」がスタートして1年を迎えようとしている。この支援費制度のスタートのみならず、近年、障害をもつ人を取り巻く福祉の流れは大きく変化している。中でも入所施設から地域の住まいへの移行は、その流れをさらに速める勢いである。そのことを象徴するかのように、2002年7月厚生労働省が「入所施設偏重を転換」する方針を発表した。11月には宮城県福祉事業団が入所施設の「解体宣言」を行った。2003年8月には、国立コロニーのぞみの園[1]が入所者数を減らすことを目標に含めた報告書を出し、2004年2月20日付けの朝日新聞では、宮城県における知的障害者入所全施設解体の記事が一面のトップを飾った[2]。これらはほんの一部にしか過ぎない。「脱施設」「地域移行」ということばを見聞きする機会は明らかに増えている。

そこで、筆者らは入所施設から地域の住まいへの移行に取り組んでいる宮城県福祉事業団の施設「船形コロニー」において調査を実施した。宮城県福祉事業団は、2010年までに現在入所している利用者を全員地域に移行するという「解体宣言」を行っている日本でただ一つの施設である[3]。ここでは今回の調査から明らかになった「解体宣言」を行っている施設の①地域移行の取り組みの実際②移行時の実態と課題③移行後の地域生活の実態と課題を報告する。

1・船形コロニーとは

1965年に社会福祉法人化された宮城県福祉事業団が経営受託されている施設の1つである。1973年に定員150名の更生施設としてスタートし、その後増員、増設をくり返し、更生施設400名、授産施設100名定員の大規模入所施設となった[4]。1993年に浅野史郎氏が宮城県知事に就任されたことが契機となり、船形コロニーは地域移行への取り組みを行うこととなった。具体的な取り組みは1995年から開始され、グループホーム（以下GHと略記する）や在籍のままコロニーの敷地外で生活する自立訓練ホームを立ち上げた。しかし、地域へと移行し空きになった籍を新たな入所者が埋めていたため施設の規模は変わらなかった。このような状況を打破するため2002年11月「解体宣言」が出された[5]。

約47万平方メートルある広大な敷地内には、定員100名の4つの更生施設と、定員100名の授産施設が1つある。4つの更生施設のうちH園は生活支援課と行動支援課に分かれている。生活支援課は自立訓練ホームに関する支援を行っているが、自立訓練ホームに移る前までを担当するセクションと自立訓練ホームへの支援を担当するセクションとがある。H園以外の施設は100名を25名ずつのファミリーに分け、園内での生活支援を行っている。授産施設は入所部と通所部があり、入所部の作業内容は座布団作りやさをり織り、園芸、包装材料加工や製袋加工、施設内の清掃などである。通所部は乗馬療法と農産物生産を行っており、どちらも更生施設の利用者が「施設利用実習者」として数名通って来ている。町の中には地域福祉サービスセンター「ぱれっと」が設置されており、GHへの支援を担当している[6]。

2．船形コロニーにおける実態調査

（1）調査方法

船形コロニーにおける調査は2003年8月、9月にそれぞれ約1週間かけて実施した。調査は、半構造化インタビューを用いた質的なもので、先行研究[7]のものを参考にした4種類の調査票を用意した。本人に関する補足調査用紙（調査実施前に職員に記入していただく用紙）、本人用調査用紙、家族用調査用紙、職員用調査用紙であり、これらの調査用紙を参考にしながら、一人ずつ面接形式で行った。面接場所は本人については生活されているホーム内で行ったが、職員や家族は対象者の都合に応じて様々であった。面接は記録者として調査者が2名入ることやコミュニケーションが難しいため職員が同席するケース、家族の中にはご夫婦で対応してくださるケースもあったが、ほとんどが1対1で実施した。ことばのみでのコミュニケーションが難しい方の場合は、調査者が準備した絵カードを使用した[8]。対象者の了解を得て、録音をさせていただき、調査票の各項目に沿って内容を抽出、要約または抜き書きし一覧表にまとめた。

（2）調査対象者

対象者の選定は、船形コロニー側に依頼した。その際①本人については入所施設居住の経験があり、現在自立訓練ホームで暮らしていて近々GHに移行予定の人20名と現在GHで暮らしている人20名②できるだけ調査対象となる本人の親・親族10名③調査対象となる本人を知っている職員10名を選んでいただいた。対象者の年齢や性別比等は以下の通りである。

《対象者の内訳》

本人　男性20名　　女性20名

・年齢

男性　年齢幅21～78歳　　平均年齢49.9歳

女性　年齢幅23～73歳　　平均年齢54.4歳

・施設在所年数幅と平均年数

男性　年数幅1～38年　　平均年数14.5年

女性　年数幅1～39年（1名不明）　平均年数15.1年

・地域生活居住年数幅と平均年数

男性　年数幅0.1～6年　　平均年数3.9年

女性　年数幅0.5～7年（不明2名）平均年数3.4年

家族　男性8名　　女性9名（ご夫婦揃って面接したケースもあるため）

・続き柄

親　　3ケース

きょうだい　7ケース

職員　男性7名　　女性3名

・現在の勤務先

男性　　地域福祉サービスセンター4名　　H園生活支援課3名

女性　　地域福祉サービスセンター1名　　H園生活支援課2名

まずは、職員への調査から明らかになった移行のプロセスを報告する。

（2）地域への移行プロセスの実際

船形コロニーは調査当所13ヶ所の自立訓練ホームと20ヶ所のGHをもっていた。先述したように自立訓練ホームは4つある更生施設のうちH園が支援機関となり、GHは町中に設置されている地域福祉サービスセンター「ぱれっと」がバックアップを行っている。自立

訓練ホームからGHへ移行することで、支援機関が変わることになるが、引継ぎを行うと同時にGHへ移行後しばらくは、地域福祉サービスセンターが中心となりながらH園の職員もフォローを行っている。しかし、連絡を取り合ったり情報交換する場を定期的に設定することはない。職員への調査から自立訓練ホーム、GH とも定められた移行の流れはないが、主にH園内から敷地内の職員宿舎を利用後自立訓練ホーム、さらにGHへと移行する流れと授産施設から自立訓練ホームあるいはGHへ移行する流れがあることが分かった。また、船形コロニーの特徴的な取り組みとして、現在の自立訓練ホームをGHに「制度替え」することで利用者が「引っ越し」という手順を踏まずにGHへと移行する流れもあることが分かった。これらの流れを図に示すと以下のようになる。

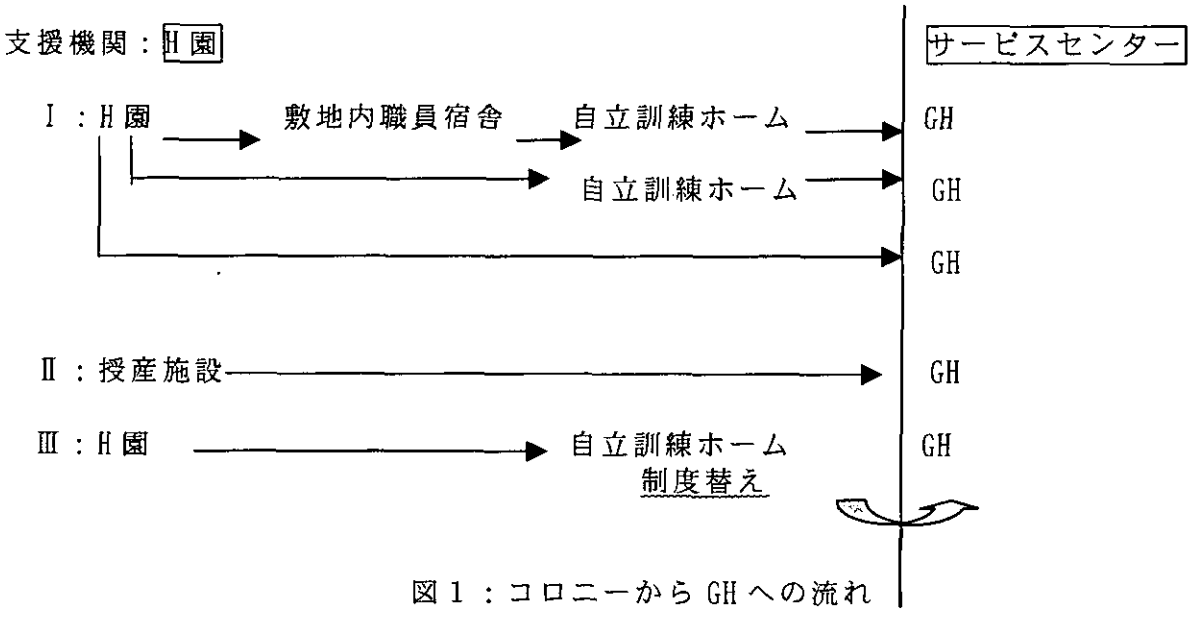


図１：コロニーからGHへの流れ

これまで生活していた場所から自立訓練ホームやGHに移る場合、「本人の意思を確認し、家族の同意を得、体験・見学などを行った後、最終的には施設の調整会議で決定」という手順であることが分かった。GHに移行した利用者は、年度末に開催される「壮行会」に参加し、船形コロニーから籍がなくなったこと、つまり地域での生活がスタートしたことを実感する。現段階では「地域での生活＝GH」であり、GH以外の選択肢は用意されていない。以上が船形コロニーにおけるGHへの移行のプロセスである。

移行の方法の１つとして生活の場所は変わらないまま制度を変えることで自立訓練ホームからGHへと移行する取り組みもされているが、自立訓練ホームとGHの違いはどのようなものだろうか。

先述したように自立訓練ホームの利用者への支援はH園の生活支援課が担当している。それは船形コロニーに在籍のまま自立訓練ホームで生活しているからである。よって利用者が支払う費用も委託費の中で賄われ、委託費を越えた費用については個人負担となっている。また、食事も船形コロニーと同じ法人が経営している高齢者施設等から配食される。職員は施設から運ばれてきた食事を配膳したり、洗濯、掃除の補助をしたり、高齢であるためリタイヤされている利用者の日中活動の支援を提供している。また、夜間も支援を要する方が利用しているホームでは職員が宿泊して対応している。そして、GHへの移行を目指した支援を提供することになっている。自立訓練ホームによっては、１名の体験利用枠があり、H園と自立訓練ホームを行き来しながら地域生活を体験し、移行していく方法も取り入れている。

一方 GH に入居するということは船形コロニーから籍がなくなるということであり、GH

の光熱費や食費等は入居している利用者がその額に応じて負担することになる。また、支援も地域福祉サービスセンターから配属された世話人が行う。世話人は地域で暮らしている方たちであり、朝と夕方にGHに入る。主な仕事は食事作りであり、他に健康管理、通帳管理や洗濯や掃除などのフォロー、通院支援などである。それぞれの違いを示すと表1のようになる。

表1．自立訓練ホームとGHの違い

	自立訓練ホーム	G H
支援機関	船形コロニー内の更生施設	地域にある地域福祉サービスセンター
籍	船形コロニーにあり	船形コロニーになし
費用	委託費	利用者で応分に負担
支援者	更生施設の職員	世話人
食事	同法人の高齢者施設等から配食	世話人が作る

（3）移行時の実態と課題

このような移行のプロセスを利用者本人や家族はどのように感じているのであろうか。まずは、本人への面接の中から見えてきたことを報告する。

施設から自立訓練ホームに移る場合も、自立訓練ホームからGHに移る場合も、実際に引っ越すどのくらい前に移行することを知ったかという設問に対して、具体的な時期を覚えている人は少なかった（10%）。しかし、「1ヶ月前くらい」「突然」と答えた人もいた（13%）。また、自立訓練ホームで生活している本人のうち、聞き取りが難しかった方を除くと大半の方が「引っ越しは職員から言われた」「引っ越しは職員が決めた」（73%）と答えており、「見学も宿泊体験もなく移行した」「引っ越しが決まった後、見学や宿泊体験をした」という答えが多かった（73%）。先述したように、今後制度替えでGHに移行することが決まっている自立訓練ホームを利用している方に「GHに移行することは知っているか」「GHになると何が変わるか聞いているか」と質問したところ「GHに変わることは聞いている」と答えた人は少なくなかった（66%）が、何が分かるのかについて「知っている」と答えた人はいなかった。

一方、現在GHで暮らしている人たちも、「職員に言われて」GHに引っ越したと答えた人はいた(3.3%)が、「相談して」「自分で決めた」と答えた人もわずかであるがいた(2.7%)。現在暮らしている場所が、制度替えによってGHになった方も調査に含まれていたが、今現在もそのことを理解されていない方もいた。その方は「昔は自分がみんなの食事も作っていたが、ある日世話人が来ると聞かされ、それ以降していない」と語っていた。

以上のことから、事実はどうであれ、職員の調査で明らかになった「本人の意思を確認した後移行を進める」という手続きについて、本人たちとの捉え方に違いがあることが明らかになった。特に制度替えについては、生活の変化を口頭説明だけで伝えることは不十分であり、そのことが本人たちにも混乱を及ぼしていることが分かった。一方で伝え方の難しさもあり、大きな課題であることが明らかになった。

家族は移行についてどのように感じているのだろうか。今回調査させていただいた家族の中に移行プロセスそのものを強く批判している人はいなかったが、「コロニーが決めたことだから仕方なかった」と振り返る人はいた。将来への不安は抱えながらも（50%）現在の本人の住まいや生活については「落ち着いている」「コロニーの時より自分でできることが多くなった」と肯定的に捉えていた（75%）。しかし、「何かあれば責任をもって引き受けてくれる」と思っていた（50%）船形コロニーが解体されるという「解体宣言」については、不安や「無理だろう」という否定的なことばが多く語られた（75%）。

これまで施設側は移行について家族に説明する際「何かあればコロニーが…」と言っていたことが分かった。「そのような約束の文書をもらった」と語った方もいた。これからは「解体宣言」が移行に対する家族の承諾を得ることの妨げになる可能性はある。「何かあればコロニーが…」以外の手立てを打ち出さなければならないだろう。

（4）移行後の地域生活の実態と課題

ここでは、本人への調査を通して明らかになった自立訓練ホームやGHでの生活の実態を報告する。調査票の各項目に沿って自立訓練ホームとGHの生活の特徴をまとめ、表2に示す。

表2．自立訓練ホームとGHの地域生活の実態の特徴

調査表の項目	自立訓練ホーム	G H
生活状況	・2～7人のホーム ・個室が確保されていない人も多い ・ホームによって職員の対応や日中の過ごし方に違いがある ・個室以外は全て共同 ・掃除や洗濯は当番制あるいは全て職員が行う	・2～5人のホーム ・個室が確保されているが、襖で仕切られているだけの場合もある ・部屋にある家具が自分のものでない場合が半数 ・掃除や洗濯は当番制であり、その多くを世話人が決めている ・起床時間や就寝時間が決まっているなど規則があるホームもある
日中活動	・半数がコロニーへ仕事に行く ・半数はホーム内の活動としてテレビを見たり買物、ドライブに行っている	・一般就労4名 ・他はコロニーにて仕事 ・コロニーの人ばかりが乗ったバスで通う ・仕事は気に入っている
経済	・こずかい1ヶ月4,000～5,000円 ・お菓子や小物を購入 ・通帳管理は職員（自分には無理だと思っている） ・ホームによってはこずかいも職員が管理 ・年金をもらっていることを知らない人が多い	・こずかい額ばらつきあり ・給料や年金額を知らない人もいる ・通帳は世話人が管理
余暇活動	・共同スペースに全員が集まって過ごすことが多い ・何かをする時はホーム単位で行動	・一人で過ごす人多い ・テレビを見る、音楽鑑賞、買物と答えた人多い ・ホーム内で過ごすことも多い
対人関係	・友だちはホーム内に限られている ・友だちがもっとほしいと思っている人は多い ・近所の人とはあいさつ程度	・職場での付き合いが主である ・相談は世話人にしている ・「結婚」「子ども」について「したい」「ほしい」と答える人も

	・「職員と～する」ということが多い ・「恋人」「結婚」「子ども」について「ほしくない」「したくない」と答える人多い	いる
会議・話し合い	・ホーム内の話し合いがある ・ホームの代表者が月に1度コロニーでの会議に参加し要望を伝えている	・授産通所部の自治会がある ・GH利用者の自治会があり、レクの企画をしている ・一方で話し合いの経験なしと答える人も多い
教育	・小学校のみという人が多い	・学歴は様々である ・エピソードがあまり語られない
将来への希望	・GHで暮らしたい ・小遣いの管理を自分でしたい ・もっと外出したい ・もう少し広いところで暮らしたい ・家を建てたい ・縫い物をしたい ・料理をしたい ・旅行へ行きたい ・ダンスがしたい ・別の人と暮らしたい ・今のメンバーと暮らしていきたい ・高齢者施設内のコーヒーショップで働きたい ・バトミントンをしたい ・いろいろやってみたい ・テレビを見たり音楽が聞きたい ・ここで暮らしていきたい	・携帯電話やパソコンを使いたい ・料理をしたい ・一人暮らしがしたい ・ソフトボールでもっと活躍したい ・一般就労したい ・暮らす場所を変えたい ・結婚したい ・子どもがほしい ・時々絵を描きたい ・歌手になりたい ・健康でいたい ・車の免許がほしい ・アメリカ旅行に行きたい ・病院で働きたい ・母親の世話をしたい ・トラックの運転手になりたい ・ここで暮らしていきたい

この表から見えてくる課題について述べてみたいと思う。

①生活状況について

個室が確保されていないホームがあった。二人部屋であったとしても、本人たちが望んで相部屋になっていないのであれば、入所施設と同じ状況だと言える。また、一人になれる空間が確保されていたとしても、襖1枚で仕切られているだけではプライバシーの保護から十分だとは言い切れない。日本家屋の特徴でもあり致し方ないことではあるが、だからこそGH以外の生活の場も検討することが求められるだろう。GHについては、世話人の影響で保護・管理的環境になっていることが「規則の多さ」から伝わってきた。世話人の質の問題を改善する1つの方法として、世話人の配属に本人たちが関われるような仕組みを作ることも考えられるのではないか。

②日中活動について

コロニー内へ仕事に行っている人が多く、言い換えると施設の敷地外で朝夕過ごすだけで、それ以外はコロニー内で過ごしていることになる。また、通勤も船形コロニー貸切のバスを使用しており、地域の中で暮らしているとは言い難い状況である。自立訓練ホームで暮らしている方の中には、高齢のため日中もホーム内で過ごしている場合が多かった。その活動はホーム内に限られており、選択肢が狭いことを表している。他の事業所や法人

のサービス、地域の資源を巻き込み利用することで選択肢を広げることが可能になるのではないかと思われた。

③経済

小遣いの額に不満を訴える人はいなかった。これは先に述べた日中活動、これから述べる余暇活動や対人関係の狭さを考えると、小遣いを使う場や機会が少ないからではないかとも考えられる。自立訓練ホームでは買物に行った際、支払いを職員がまとめて行っているところがあった。そのホームで暮らす本人は「自宅へ帰った時は、自分で財布を持って一人で買い物に行く」と語っていた。ホームでいるより「自立した行動」と言える。GHにおいても通帳管理は世話人であった。今後自立生活を目指すのであれば本人たちが金銭管理に少しでも関われるような支援をすることも必要であろう。

④余暇活動

自立訓練ホームにおいては「一人で～している」という人はいなかった。個室にテレビがなく、また余暇に関する選択肢も十分ではないため、共同スペースでテレビを見て過ごす人が多かった。一方GHになると多少自由度が高くなる。その分何をすればいいのか分からず「一人で過ごす」ことも多くなっているようである。また公共交通機関の駅から離れているという地理的な問題も行動範囲や活動内容を狭めていると考えられる。ガイドヘルパーの利用や車の免許を取得できるような支援も考えられる。

⑤対人関係

職場での人間関係が主であった。言い換えると日中をホーム内だけで過ごしている場合、対人関係は広がりにくいと考えられる。「結婚」や「子育て」などはイメージを抱けていないことが「したくない」「ほしくない」という答えに繋がっているのではないかと思われた。自立訓練ホームよりは自由度が高く、多少選択肢が広がっている GH で暮らす本人たちが「結婚したい」「子どもがほしい」と思えるのは、そのようなことをイメージできる機会をもてているからではないか。結婚や子育ては身近にモデルがいることがイメージを掴みやすくする。一般就労することはそのようなモデル的存在と出会える可能性を高くする。これらのことから仕事についていない人の日中活動の場にホーム関係者以外の人を巻き込むことや仕事をしている人についてはコロニー内に限らず一般就労も含め選択の場を広げることが重要であると考える。また、GH の利用者の多くは、悩みを世話人に相談していた。しかし、世話人の業務や滞在時間、複数で暮らしていることを考えると世話人一人で十分に対応することが難しいのではないかと思われた。このことも対人関係の広がりによって、多少は解決するだろう。

⑥会議・話し合い

「自治会」「○○の会」「ホームの話し合い」などいくつか話し合いの場が出されたが、それぞれの活動内容については把握できなかった。また、「話し合いに行った経験がない」と答えた方が自分の意思で参加していないのか、そのような機会があることを知らないためかということも掴むことが難しかった。一方で、このような会において何らかの役割についている方は、そのことを生き生きと語られており、改めて何らかの役割をもち活動することことが自信に繋がることが分かった。このような会の支援者としてコロニー関係者以外の人に関わってもらい、本人たちの力を強めて行くことも必要な支援となってくるだろう。

⑦教育

高齢の方が多いためか小学校のみ普通学校に通ったという人が少なくなかった。学校時代のエピソードについては、いい思い出もつらい思い出も語られた。学校時代を楽しく振り返っている人は「これから～について勉強したい」と語っていることが多かった。

⑧将来の希望

語られた希望を全て羅列した。「～をしたい」＝「～できる支援がほしい」と思われたか

らである。自立訓練ホームで暮らす本人の生活は選択肢が十分でないこと、GHで暮らす本人たちはよりステップアップを目指していることが伝わってくる。「～をしたい」という具体的な事柄一つひとつに応えることも大切であるが、実現が難しいものもある。まず、「～をしたい」という希望をこれだけたくさん抱いていることを理解し、その「思い」を支えられるような支援のあり方を検討することが大切であろう。

おわりに

今回の調査を通じて「1つの施設でできることの限界」が本人たちの思いや生活を制限してしまうことが見えてきた。確かに船形コロニーは「解体宣言」を行った唯一の施設であるが、本人たちの思いや地域における生活を支える支援を船形コロニーだけで作り上げていくことは難しい。他の事業所や法人と連携をとることも大切であろうし、地域の様々な資源を活用していくことも大切である。また、支援体制を作り上げる中に、いかの本人たちの声や力を取り込んで行くのかということを考えることも重要である。今回は面接調査を通じて明らかになった実態を伝えることが中心になってしまったが、これらは今後、考え続けなければならない課題であろう。また、これらの課題を解決できる取り組みを具体的に提示できることが「何かあればコロニーが…」以外の手立てに繋がってくるだろう。

最後に、もう一度「表2．自立訓練ホームとGHの地域生活の実態の特徴」の「将来への希望」を見てほしい。「ここで暮らしていきたい」という希望がある。このことばから「今の生活に満足している」ことが伺える。しかし、このことばの裏には「もう突然の引っ越しはイヤだ」という思いも隠されているのではないだろうか。実際「ここで暮らしていきたい」と答えた方は移行のプロセスにおいて何らかの不満を抱えていたり、何度もホームを変わってきた経緯があった。このことばは「移行のプロセスにおける私たちの思いや声を大切にしてほしい」というメッセージも込められているのではないかと感じている。

注

1) 2003年10月より「独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」となる
2) 「知的障害者入所全施設『解体』宣言へ」朝日新聞、2004年2月20日
3) その後、全員地域に移行するのではなく、他法人が経営する入所施設への「移し替え」も取り組みに含めることになる。経緯の詳細は以下参照。
   ・工藤範男「脱施設・船形コロニー解体と地域生活移行」『福祉労働』第99号、39頁～46頁、現代書館、2003年6月。
4) 社会福祉法人宮城県福祉事業団「挑戦！そして、創造－昨日から今日、今日から明日へ－」1996年1月。
5) 工藤範男（2003年）前掲書。
6) ここで記した施設の体制や定員は、2003年8月の調査当所のものである。
7) 河東田博他「知的障害者の入所施設から地域の住まいへの移行に関する研究」科学研究費補助金、2000～2002年度。
8) 本人用調査用紙の項目に応じたイラストを主にPIC（Pictogram Ideogram Communication）から選択し、作成した。例えば「洗濯は誰がしますか」という設問の際、洗濯機の絵カードを提示した。また、「はい」「いいえ」「わからない」という絵カードも作成し、本人に指さしをしてもらったり、調査者が指し本人の意思を確認することに使用した。しかし、多くの調査対象者は、日常生活において絵カードを使用するという経験がないためかイラストのみに関心を示すことにとどまり、調査項目を補うにまで至らないこともあった。

宮城県船形コロニーにおける地域移行の実態と課題

立教大学・三宅　亜津子

1．はじめに

～忘れられない出会い～

筆者は短期大学時代と施設職員時代に生涯忘れられないある出会いを経験した。それから十年以上もこの出会いに励まされ、時に落ち込むなど絶えず自分を揺さぶり続けてきた。

一つ目の出会いは、短期大学時代の知的障害者授産入所施設実習で出会ったUさんである。彼の話し振りや勤勉な作業ぶりは、こんな人が施設で生活しないといけないのかと不思議に思わせた。そして、Uさんといろいろ話を交わすうちに、彼が私と同じ地域ということが分かった。彼は、地元の小学校で特殊クラスに通っていたあのU君だった。懐かしさよりも、どうしてこんな実家から遠く離れたこんなところで生活しなければならないのかとそのとき我に返ったようにはっとさせられた。事前に入所施設についての予備知識や実習中に体験的に知る機会もあったなかで施設の特異性を感じるできごとだった。

二つ目の出会いは、短期大学卒業後知的障害者入所更生施設に就職してからのことである。施設実習で障害をもつ人と施設について疑問を感じた部分があったものの、当時知的障害を持つ人と関われる仕事は入所施設がほとんどだったことから、特に戸惑いはなかった。

その施設で入所者のAさんと再会する。彼と私は近所で、幼稚園が一時期一緒のクラスだった。Aさんは、いつもニコニコしながら教室をかけまわっていた。それに対して、クラスの先生はAさんに対して常に怒り口調で、付き添っていた彼のお母さんはそのたびにとても悲しそうな顔で謝っていたのを憶えている。そしてある日、Aさんはお別れ会もないまま幼稚園に来なくなった。それ以来十数年ぶりに会ったAさんは、背が高く笑顔のとても優しい大人の男性になっていた。しかし、同じ年に生まれた私たちが職員と利用者という形で再会したことは、筆者にとっていいようのない矛盾と切なさを抱かせた。

そんな切なさも施設の職員として月日を重ねていくうちに、いつしか心の隅に追いやられた。今思えば、切なさは筆者にとって施設職員であることを揺るがせるものと捉えてしまったのかもしれない。それからは、「施設だからこそ支援できること」を仕事のアイデンティティとして見出すようになり、その結果次第に利用者のことが見えなくなっていった。

ここ数年、入所施設での地域移行の取り組みが少しずつではあるが動きとしてみられるようになってきた。障害の重い人の地域移行について期待と本当に可能なのかという疑念が交錯すると同時に、かつて抱いた切なさが日増しに存在感を増すようになってきた。

そこで、本研究の目的は入所施設における地域移行の実態から課題を抽出しその可能性を探ることとする。取り上げる入所施設は、施設解体宣言をした宮城県船形コロニーである。

2．入所施設の地域移行の実態

(1)統計からみた地域移行の実態

2000 年度の「知的障害児(者)基礎調査結果の概要」によれば、知的障害者の総数は 45 万 5500 人と推定され、そのうち 29%にあたる 12 万 6300 人が施設入所している。前回の 1995 年度の調査による施設入所者は 11 万 5900 人であり、比較をすると 1 万 400 人増加し

ている。また、知的障害者の生活の場では施設入所と家族同居で86.3%にもなり、グループホームで暮らす人や単身や結婚生活をしている人、会社の寮などの自立生活している人は全部合わせても7.4%に過ぎない[1]。

障害者政策においては、1993年の「障害者対策に関する新長期計画」の具現化のために、1996年度から2002年度までの七ヵ年計画として「障害者プラン（ノーマライゼーション7ヵ年戦略）」[2]が策定された。その基本的考え方の1つに、「地域で共に生活するために」という項目が挙げられており、いわゆる住まいの確立に関する目標数値が打ち出されている。7年間の目標数値は、グループホーム・福祉ホーム等が5000人分から20000人分であるものの、入所更生施設も85000人分から95000人分の同じくらい増加されている。入所施設自体が地域で共に生活する場か、それとも入所施設から地域移行する数を見込んでいるのか、それとも地域移行が頭打ちになることを想定しての伏線なのか、数値増加の意図は見えにくい。2002年度末の数値目標の達成度は、グループホーム・福祉ホーム等が20861人分で、うち知的障害をもつ人のグループホームは11436人分である。

2003年から2007年までの新障害者プラン[3]では、グループホームは30400人分で旧プランと比べて増えてはおらず、とても地域移行に弾みをつけるとは思えない。また、入所更生施設は「真に必要なものに限定し地域資源として有効に活用する」となっているが予算上は旧プラン並に確保され、今後も施設数が増加する懸念がある。

(2)知的障害者入所施設Ａの地域移行の実態

筆者が勤務していた当時の知的障害者入所更生施設Ａ（以下Ａ施設）は定員80名、その他の同法人施設として通所授産施設（定員40名）、グループホーム（定員４名）を持っていた。1995年当時で3名がグループホームで生活していた。

グループホームは、Ａ施設から車で5分ほどの距離にある4ＤＫの一戸建て、近隣に世話人が住んでおり食事や生活費管理、相談などを支援していた。休日や夜間等の緊急時には、バックアップ施設であるＡ施設が対応し、筆者もその関係で休日のグループホームへの食事作りなど何度か行ったことがあった。そこで、利用者がそれぞれ好きなように自分の時間を過ごされている様子を実際にみて、ここへ引っ越してよかったのだという安堵感の一方で施設生活との大きな隔たりを度々感じた。利用者の一人にグループホームの感想を尋ねると「ここの方がええな」と答えていた。施設は、4人部屋のため一人で好きなことをする空間も余暇の数もほとんどなかった。また、施設は部屋が狭いので自分の私物を置く場所は狭く限られていたが、ここでは一人部屋を持ちお気に入りのものがたくさん置かれていた。自分の空間をもつことによってその人の個性というものがはじめて出てくるということにあらためて気づかされた。また、入所施設では集団の要素が強く個が弱くなってしまう面があるが、一方のグループホームでは自分らしくいきいきと生活していることが対照的であった。

グループホームの対象者は、「身辺処理がある程度可能な」「一般就労者」（一般就労要件は1998年より撤廃されている）だった。グループホームは措置外のため、住居費や食費、光熱水費等を自己負担できる、ある程度の収入が必要であった。そのため、Ａ施設のなかでグループホーム利用者に該当する人はほとんどいなかった。グループホームが1つしかなかったこともあるかもしれないが、施設利用者には身辺処理が可能な人が割といるものの、一般就労という条件がネックになっていた。筆者自身もグループホームは自立した人が生活する場という認識だった。

当時のＡ施設での地域移行を振り返ると、「自立した」特別で限られた人が対象であったため、施設利用者にとっては条件の厳しいグループホームに希望を持ちづらかったように思われる。

以上のＡ施設における地域移行に関する筆者の体験を踏まえ、次項では大型施設における

施設解プロセスをみていく。

3．宮城県船形コロニーの施設解体宣言と施設解体プロセス

近年、知的障害者施設の地域移行の取り組みが、大型施設では長崎県コロニー雲仙、北海道太陽の園、長野県西駒郷などで見られるようになってきた。この章で取り上げる宮城県福祉事業団も、一昨年船形コロニー施設解体宣言のもと地域移行に取り組みはじめている。

(1)宮城県福祉事業団施設解体宣言前までの経過

宮城県福祉事業団船形コロニー(以下船形コロニー)は、1973年最重度の知的障害を持つ人への中長期援助と自立を目指した総合援助施設として開設。4つの入所更生施設（とがくら・かまくら・はちくら・おおくら）の400名と1つの入所授産施設（セルプふながた）の100名、計500名からなる。その他、グループホーム20ヶ所と自立訓練ホーム15ヶ所を運営している。コロニーは、山々に囲まれた広大な敷地で、その敷地の中に入所施設がそれぞれ点在している。大きな建物(居住棟)がところどころ目に付くが、何故か人が生活している雰囲気がほとんど感じられないような異空間のような所である。

1997年、長崎県コロニー雲仙で地域移行の取り組みをしてきた田島良昭が、宮城県知事の要請を受け宮城県福祉事業団の副知事長（その後理事長）に就任した。田島によれば、「1997年の前後数年で船形コロニーを出た人はたったの7名。それは、地域移行によるものではなく全員病気等でなくなったのであった。20数年間、人権もプライバシーもないような施設で同じ処遇を受けつづけたことに心底愕然とした」と「それなのに、施設は家族にとっては感謝されることさえあった」という施設が変わらない悪循環を指摘している。

このような非人間的なコロニーの実態を改善するために、1998年に施設のあり方検討委員会が設置され、500名のなかで重度の高齢者・重複障害者を除く350名が地域移行の対象とすることを決定した。そして、中長期計画として、1998年から2002年までの地域移行予定者を170名と掲げた。しかし、実態はそうならなかった。

1999年には、コロニーの施設組織をニーズ別に再編成する。とがくら園は医療支援、かまくら園は高齢者支援、はちくら園は自立支援と強度行動障害支援、おおくら園はセルプでの就労支援になった。地域移行に取り組む部門は自立支援部門があたることになった。

1998年から2002年3月までの地域移行達成度は、170人中15人にとどまり依然進んでいない状況が明らかになる。

(2)宮城県船形コロニー解体宣言

2002年11月「福祉セミナー・イン・みやぎ」の場で田島が船形コロニーの解体を宣言した。2010年までにコロニーにいる485名を施設から出して地域での生活に移行することを表明した。そして、コロニーという施設で長い間、自分の意志や希望とは違った生活を強いられた利用者に対し謝罪をした。そして、利用者に対する個別地域移行プランを作成するに際し以下の留意点をあげた。なお、船形コロニーの保護者へは事前に施設解体の説明の機会を設けた。

①地域移行が現在の船形コロニーでの生活よりさらに安心と満足感が得られるような生活ができる環境を整えること。
②地域移行で保護者や家族に保護や支援の責任を押しつけず、事業団がアフターフォローを行うこと。保護者や家族の不安を取り除くためにも地域での支援の仕組みを作り上げる必要がある。

③地域生活支援は、民間の社会福祉法人、ＮＰＯ、市町村社協等のさまざまな福祉サービスを活用する。

(3)船形コロニー施設解体プロセスの概要

船形コロニーではグループホームだけではなく自立訓練ホームを利用している。

宮城県の行っている自立訓練ホームとは、「地域生活への円滑な移行と利用者の生活の質の向上を目指して、施設敷地外で、少人数で生活する形態」と定義づけされている。国の自活訓練事業では訓練期間が6ヶ月だが、自立訓練ホーム事業では期間を限定していない。財源は公費と利用者の自己負担や親の会の援助である。なお、ホームは以下の4種類からなる。

A）グループホームへの移行を前提としたもの
B）　本人や家族の地域移行に対する不安や躊躇を払拭するための体験型のもの
C）地域の中にある自立訓練ホームに移行する前の訓練・体験を目的として本体施設の敷地内にある職員宿舎等を利用したもの
D）高齢かつ重度者対象のもの

これらは、施設に籍をおいたまま地域での生活ができるという特徴をもっている。このことは、施設内で地域生活の準備をすることには限界があり、現実的に体験するほうが利用者にとっても有効だという事を意味している。したがって、自立訓練ホームは本人だけでなく家族にとってもグループホームへの移行を見極めることができる試行期間となり、重要なステップであるといえる。なお、船形コロニーの地域移行のプロセスについては、3つのパターンがある。

1）コロニー　⇒　自立訓練ホーム　⇒　グループホーム
2）コロニー　⇒　グループホーム
3）コロニー　⇒　宮城県内の民間入所施設（入所更生施設、特別養護老人ホーム等）

2003年から2005年の3年間で220人が施設からグループホームもしくは自立訓練ホームに移行予定である。しかし、3）の場合ではコロニーから民間施設への移行では単なる「施設移動による住み替え」に過ぎず、地域移行がこのような解釈をされたことについては問題があると思われる。つまり、施設解体という目的にそえるだけの肝心の地域移行にはこたえられてはいない実態が明らかである。

4．船形コロニーにおける地域移行の実態と課題～実態調査にもとづいて～

ここでは、地域移行の実態と課題を探るべく、コロニー内の入所施設と自立訓練ホームでの生活体験　及びインタビュー調査をもとに、施設やホームの成り立ちや取り組みの状況、利用者の生活の様子に焦点をあてる。

(1)　船形コロニーにおける地域移行への取り組みと地域生活の実態－実態調査(1)

A．船形コロニーT園での生活体験

①施設概要

1993年に重度・最重度の知的障害者の更生施設として開設。1999年のコロニー組織改編により、主に医療のケアの必要な利用者や高齢者の生活施設となる。定員は100名で、男女別に各25人の四つのファミリーからなる。職員は、各計43人、看護士は全体で9人等

である。嘱託医は1人いるが常駐はしていない。

②T園の100人たち
以下はT園の利用者状況についてである。

- 毎日10人～15人が通院し、入院患者は平均4～6人で、一日平均15人～20人が医療機関にかかっている。
- 生活している人の年齢は18～82歳で、平均56歳。
- うち65歳以上は20%。
- 平均の在園期間は17年で、20年以上が50パーセント。
- 90パーセント以上が何らかの薬を服用。
- 約40人以上が車椅子で生活している。
- 80人以上が制限食または特別食を食べている。

1999～2002年までに亡くなった人は20名で、ほとんどが病気によるもの。

③一日の流れ
T園の一日の流れは次の表のとおりである。

5：30	起床、着替え、洗面、排泄、検温	16：00	排泄
7：30	配膳	18：00	夕食
8：00	朝食	19：00	洗面、余暇
9：45	ファミリー・デイ活動	19：30	夜間入浴（自力可能な人）
11：00	排泄	20：00	就寝準備
12：00	昼食	21：00	就寝
13：30	入浴　/ファミリー・デイ活動	随時	夜間トイレ誘導
15：00	おやつ		

以前は、早朝の職員数が少なく、朝食に間に合わせるため4：30より身支度の介助に入っていたが、あまりに早すぎる起床であるため、職員配置を含め日課の見直しをしている。

④一週間の流れ
T園の一週間の流れは次の表のとおりである。

	午　前	午　後
月	移動乗馬	入浴　/D活動
火	コーヒー喫茶 /F・D活動	F・D活動
水	F・D活動	入浴　/D活動
木	コーヒー喫茶　/F・D活動	F・D活動
金	F・D活動　地域生活体験	入浴　/D活動　地域生活体験

土	余暇（外出等）	余暇（外出等）
日	余暇（外出等）	余暇（外出等）

F：ファミリー、D：デイ（リハビリ班・個別支援・療法班）

⑤地域移行にむけての取り組み

地域移行に向けての取り組みは、次のとおりである。

a. ケアプラン作成

b. 園内での自活訓練（職員休憩室を使用）

週一回 4～6 名の小グループで調理をして会食。

c. 事業団運営の特別養護老人ホーム「和風園」で実施している逆デイ・サービスやわらぎホームでの高齢者との地域生活体験

介護保険を使って週一回利用。

その他、地域移行として特別養護法人ホーム近申請者が数名。

d. 地域生活を目指しての園内実習

現在 1 名が、園内のリネン回収を 300 円の時給で実習。

⑥生活の様子

居室は 2 人部屋、利用者の状態にあわせてギャッジアップ式ベッドがおかれていた。利用者の私物は部屋の中は少しみられたがほとんど作り付けの収納に収められている。また、部屋のドアの引き戸はほとんど明けはなたれている。ハード面はバリアフリーで居室も明るく清潔感があったが、利用者の多くは部屋でなく廊下やデイルームで過ごしていた。

デイルームにはソファと食事用のダイニングセットが置かれていた。そして、チャンネルが変えられないままのテレビがついていた。家庭で使われるような家具やテレビを置いても、他に物らしいものがみあたらないその空間は筆者には浮いて見えた。利用者に話し掛けると言葉や笑顔など何らかの表情で返してくれるものの、それ以外は特に何もすることがなく生気の無い様子にみえた。一見ではあるが、高齢の利用者でなぜこの施設にいるのかと思えるような人も見受けられた。

当日のデイ活動は、化粧品の美容員によるメイク講座だった。メイクされる利用者が何度も鏡を覗き込み満足そうな人や、その様子をみている他の人のまなざしなど、それまでみた表情とは異なるものだった。楽しい・嬉しいという感じる気持ちはそれぞれにあり、長い施設生活や障害の重さにがそれほど関係ないということをあらためて感じた。

食事の場所はユニット形式で、大食堂やデイルームの数箇所に分けられていた。その日のメニューは年に数回あるお好みメニューの寿司で、摂食状況にあわせてにぎりやちらし寿司が用意されていた。利用者は嬉しそうにおいしそうに食べていた。食堂は、テーブルクロスにいすにはクッションが敷かれるなど家庭の仕様になっていたが、デイルームの食事風景の方が、少人数でこじんまりとしているためか和やかでアットホームな雰囲気に感じた。

これらは、施設を経験し　知っているはずの筆者が、施設がもつ特異性や利用者に与える何かについてあらためて気づいた場面である。入所施設で暮らしたことのある当事者の「施設は全部決まっていて自分で考える必要が無い」(4) という指摘にもあるように、集団・もしくは障害の管理から利用者を受動的にさせ結果生気をなくしてしまう環境のように思われる。T園に限らず入所施設は、集団でかつ障害を持つ人に対する支援が管理的になりやすいがために利用者への影響を与える度合いが高いと言える。

では、そんな入所施設のT園の地域移行はどのように進められているのか。T園の場合、

コロニー施設の中でもとりわけ重度高齢・医療というケア整備が必要とされると考えられるが、まだ具体的には進められておらずこれからという段階のようだった。高齢であっても医療的ケアが必要であっても、それが地域生活が不可能になる要素だとはいえない。高齢者福祉にはさまざまなグループホームの形態がありそのなかには専門的なものもある。したがって、今後は重介護型自立訓練ホームと同じく、重介護型及び重度高齢・医療的ケア対応型グループホームの基盤整備が求められてくるだろう。

重介護型ではないが高齢障害者のある自立訓練ホームから生活の様子はどのようなものかなのかを次に見てみることにする。

B．自立訓練ホームＳでの生活体験

Ｓホームは、閑静な住宅街の一角に位置する４ＬＤＫの借家一戸建てである。この住宅街には自立訓練ホームやグループホームが５箇所ほどあり、他ホームとの交流の機会もある。利用者は、女性４名、男性１名の計５名。80代から50代までの高齢自立訓練ホームである。１階に、女性２名ずつの２部屋と２階は階段を使える男性の部屋と宿直用に部屋割りされていた。近々、同じメンバー、そのまま同じ家でグループホームに移行する予定とのこと。住み慣れた環境を変えず利用者にとっては負担が少なく移行できる。

Ｓホームの一日の流れについては以下のとおりである。

6：00	起床	15：30	ティータイム
7：00	朝食	18：00	夕食
	ホーム活動、ティータイム	19：00	入浴
12：00	昼食		余暇
13：30	活動	21：00	就寝

高齢のため、日中活動は主にホームか、他ホームと合同活動など、全体的にゆったりとした流れである。食事は、近くにある事業団運営の特養のものをほとんど取り寄せているが利用者の好きなメニューは職員が作ったりしている。

筆者が生活体験した日は、特にホーム活動はなくリビングのテレビを見たり好きなことをしながらのんびりくつろいでいた。利用者には、身体に障害のある人や会話が難しい人などさまざまだが、みんな表情が明るく生き生きした様子が施設の利用者とは対照的であった。施設のような大規模な生活空間で集団のなかの一人として生きるよりも、小規模な生活空間の一般住宅で個人として生きることの方が、人間として大切なことではないのだろうか。

そんな魅力的な自立訓練ホームだが、施設的要素が感じられる場面がいくつかみられた。例えば、一日の流れが施設とあまり変わらず、起床・就寝・入浴時間があらかじめ決まっていたり、支援者側が必要以上に利用者にリードしていたこと等である。地域生活における環境整備の必要性についてあらためて痛感させられた。

(2)　船形コロニーを出て暮らす人たちの地域生活の実態－実態調査(2)

上記４(1)では、施設および自立訓練ホームにおける筆者の体験を基に地域移行の実態をまとめた。しかし、それだけでは、地域生活の表面的な問題しかみえてこないため、実際に地域生活をしている利用者から話を聞くことにより、移行のプロセスを含めた地域生活の実態について探っていくことにする。なお、インタビュー項目は、2003年度科学研究費補助金研究「障害者の入所施設から地域の住まいへの移行に関する研究」（代表　河東田）における調査で用いられたものを抜粋して使用した。

対象者は、筆者が面接を行った自立訓練ホームおよびグループホームで生活している30代から60代までの利用者５名である。

なお、本文ではそのインタビュー項目の概要のみを以下に記す。インタビュー内容の詳細については、巻末資料を参照されたい。
「地域移行と地域生活」に関連する質問内容は主に以下の９項目であり、それぞれインタビュー形式で質問を行い、回答を得た。

①生活状況：居住形態、家具、掃除,洗濯、料理
②日中活動もしくは雇用
③経済:給料、小遣い、お金の管理等
④余暇活動：
⑤対人関係：友達,家族,地域の人、恋人,結婚等
⑥会議・話し合いへの参加：選挙、話し合い等
⑦コロニーでの生活：生活年数、地域での生活の希望等
⑧移行のプロセス（自立訓練ホームで生活している人、ＧＨの利用者）：
⑨将来への希望：

インタビューの結果は以下の通りである。

①生活状況について
ホーム定員は４～６名、一人部屋がほとんどで、台所やトイレ,浴室などは全て共同である。部屋の住みごこちは「ひろい」「いい」がほとんどで、これからも住み続けたいかの問には「一人暮らしをしたい」が1名の他は「ここがいい」という回答となった。施設という集団から少人数の生活自体は満足しているように思われた。家具は、施設で使っていたものが大半で新たな家具は「先生が買ってきた」など、自分で選んで買った人は少ない。なかには、必要最低限のものしかない施設部屋のような部屋もあった。料理については、基本的に自立訓練ホームではコロニーもしくは事業団運営の特養から用意され、グループホームでは世話人が担当している。「自分で好きなものを食べたいといえるか」は半々で、「外食」は全員がしている。

②日中活動（雇用）について
日中は、一般就労先や福祉的就労先が大半で、重度高齢者はホームで過ごしている。就労のきっかけは全て職員からのすすめで同じ仕事をつづけていきたいという人がほとんどだった。一般就労者では、将来「長距離トラックの運転手になりたい」という希望があった。

③経済について
給料は、一般就労の10万円台からコロニーでの福祉的就労の5,000円台。一般就労の場合を除くと「足りない」「もっとほしい」などとほとんどが回答していた。月々の小遣いは、「4,000円～20,000円」。その小遣いの使い道はほとんど「自分で」決めている。管理は、利用者によって「職員預かり」や「本人持ち」で対応している。貯金通帳等はＮＰＯ法人の財産管理サポートセンターが管理している。郵便局や銀行で出金や預金をしたことがあるかについては、「なし」が多かった。
ちなみに、自立訓練ホームの自己負担分は「20,000円」、グループホームは「60,000円」で、いずれも小遣い分は除いた額である。自立訓練ホームでは,施設の公費と親の会からの